



黃子敬堂
翰墨錄

四

15
12
4



葦葭堂雜錄卷之四

○筑前國遠賀郡の浦人とも中伊万里の陶器を船に積り諸國を廻り渡せし

ある者なり一説は煙の瀆作天明二年寅の五月奥州津輕より舟宿に滞留し乗組

の者銘々日毎又荷より市中在々と徘徊して賣めたり其内

有一人此者遠賀郡芦屋の住人或日山路を踏すといふと形く吟ひあり

谷川の水よあふひく野菜の屑の流を来るとを偕に此水上小人里りり

よと力を得く川は添ひ尋ねゆれり数十町を經く女房の洗濯し居るふ

逢ひ我々旅の者ふしが道ふふ迷ひく東西を分り漸これまど測り泰いふ

つ方へ行くり里み出りん教へ給りりくと申りれば女房答へて此処は深山

浪華

前鐘成

曉

晴翁

撰

此書
共
藏
印

葦葭堂雜錄卷之四

山鹿の東より山奥へ假の皇居と構へおろしませし時
士の手馴業たれば儀の物と取御所も折々捧げし
とせ我病より一日よそひ夜ふき食事減り瘦おと
行鄙の事と薬と服する便宜もきひさうりて今の中
侍らざりしが男子女童二人持て最孝心あり枕又附
侍りし或日礮又出く一のり貝と拾ひ帰るよとよく
侍りしが其味あとの外と浴し覚へし少づ食事ふり
朝夕二三日の間其貝とさんとなり終るく食せし頃
せしより身體りし倍々健なり其後更病といふ事と
と重く老衰の貌もすく所謂不老不死の薬と侍りし今

とや六百餘年と申昔語りて我をうづつとつしき
人の命に限りしものあれば夫とありたり人も世と
死し曾孫玄孫も次第なきなりぬまども唯我ひとり
歎あひて若し死事の多しはれど面影わり衰へる
と我をうづつとつとまゝ海川へたうとも身とま
度くちろしがる時人よとくられ又ある時いりなき
仙人とやんことを我がごとく長生もとるよあれば
なむと思ひし事侍りて幾代を経るに我住里のそり
限々又于海とあり往古神功皇后の御船を繫ぎ給
田圃とありし山麓瀬岩瀬もつる所も皆名の残る昔
の蹟形も見へ



侍りし今尚更飛鳥川の淵瀬もわたりし海山川里のうき思ひやれ侍る
 されば其間ハハ乱れし世もつら治れる時もつらと種々さぬぐの事とも侍りし
 うと女の身されば能も覚へたる程はつら住馴し故郷も住らく覚へれば國々
 の官々寺々をぞ拜しめざるやと思ふ心の只管又起り侍りければ子孫のりれ
 所の人々又暇とせし先豊前の國とめざる豊後の三穂の浦とせざる処又年
 と経く其後伊豫の國へ渡りたるも多くの年月を越されより土佐讃岐
 阿波など私法大師の尊とせし靈場を拜めざる船又乗く長門の國へ渡り出雲
 伯耆石見をぞおも年と経く因幡の國へまよりぬあふ法美の郡とせざる
 御社のおつらつらぬぐ侍りたる所の人詰ぐ来りて旅人の何國の
 入りやと有れば筑紫の傍辺の者として侍ふ此とせざるいふ大御神と

渡らせりしやと尋侍りしふ是こと彼六代の御代は仕へ給ひし三百余歳を
 保ら給へし武内大臣とせざる御身も若き人れば壽と祈り
 給へと聞へたるも身上のいふ氣疎くやせましくいひし然もどもた
 何氣あくりてなす実々愛度御神の御やせ給ひ類を申されあどい
 て何れと物語とせざる若き女性いひし何國へ行かんと有しふ
 極めしあどもいひし唯諸國の尊とせし神社佛閣とせし拜巡りしと答れば
 急の道とせし暫らく我許は止め申べしと有しふ任せ伴われ家富ま
 賤しかざる農家とせしひと此人鯉男とせし所の人々進めし妹春の
 かまひとせし事年久しし又夫の年ふとせし老とせし我の更ふ面影とせし
 もせ侍りし人々奇しく化生の者や有ん又切支丹とせし者や有る

此家ひより流行病（流行病）の染（染）まぢりたましく病（病）の時のあはれ貝（貝）よ水（水）を入れて飲時（飲時）
 の忽（忽）ち快氣（快氣）とぞ此故（此故）又古来（古来）より医薬（医薬）を服せしまぢりたるへり又近村（近村）の流行
 病（病）の時の此貝（此貝）を吹（吹）て殺（殺）し給（給）つる頃（頃）より此まぢりたる聞由（聞由）又明和（明和）の中頃（中頃）の
 風説（風説）は因幡國（因幡國）又筑前（筑前）より来（来）たる女（女）とていふまぢりたる者（者）りり皆々怪
 しく切支丹宗（切支丹宗）より有（有）んとて役人（役人）より國へ返（返）させしとていふ話（話）りり是（是）を思（思）ひりり
 せつとて此女（此女）は還（還）ふまぢりたる然（然）ハ奥羽（奥羽）へ行くの餘（餘）久（久）しとまぢりたる有（有）るまぢり
 岡部久伯山鹿（岡部久伯山鹿）は滞留（滞留）せしとて此物語（此物語）を聞（聞）しより庄の浦（庄の浦）へまぢりて彼（彼）りり貝
 と見（見）しよりいふも古物（古物）と思（思）しとて口のりり所々（所々）に損（損）ぐりり語（語）まりり

遠賀郡乙丸村庄屋儀平の御役所へ申上の口上と写

高村の庄の浦へ古来より持持りり貝（貝）の事 御上御用より村役所へ

若出の換作付村りり貝（貝）の事 持持りり上申の右りり貝（貝）持持りり次
 兼りり換作付村りり得た河分村りり、慥然書付ホ云りり、供性古
 右りり貝（貝）の肉喰ひ女今以遠國、経長考居申也六十年乙亥尾
 説きりり此老人（此老人）の吐（吐）き兼及、処（処）より三十年乙亥同換りり風説（風説）は此の
 得た村りり類（類）なる候少考居居りり、む村中流りり病又ハ牛馬お頼りり
 若くは次兼りり事知りり申りり、右りり貝（貝）持持りり来りり、千屋天明（千屋天明）寅
 年同換りり風説（風説）は此の事上りり、吐（吐）き付吐りり類（類）字居りり、而れ
 候りり、若隣村りり、此庄の是以、御役所へ経長考居りり、得た河内見
 りり貝（貝）、お係りり、若くは河内大御奉行様御前（御前）と作上りり、あはれ編
 事記上りり以上

寛政九年十二月

乙丸村庄屋 儀平

坂田新五郎様

御役所

遠賀郡乙丸村之内庄の浦百姓修次九郎

申上り上り

私家持信中の書命貝と名付し保言貝を以て前代中へ換上作付
別名中右に貝何事と時代より持信の取と御吟味と作付
を畏れ私名を代し乙丸村百姓の修斗と名を托年久遠庄の
浦にお住居する右に貝持信居中の名何事と代よりと作付
修何の書付と取も修斗中へ私名を代し修斗と名を以て十四歳迄奉命

取中の其子控作年私名に祖父に申上り私親ヲ控市中に以て
も八十余歳迄奉命と在り又と修斗より悪病流行仕り申し私名を代し
以て修斗中へ換上作付と名を代し貝と書命貝中へ申上り
取と名を代し貝持信居中の名何事と代よりと作付
と名を代し換上作付と名を代し

寛政九年十二月四日

乙丸村庄の浦 修次

坂田新五郎様

御役所

按じらる此長命の婦の物語の内又壽永の頃 安徳天皇西海に漂泊し
て山家刑部卿と頼ませぬ山鹿の東なる山奥に假の皇居と構へおる侍と

しるこ甚不審尤西海の戦場どつれ落させ給ひしとて夏ハ玉海醍醐寺雜
記ホも思ひ合ふれども其皇居を管々給ひしとて諸書又載る処も
ありて詳さる因よりて又出と

玉海月輪兼實公元暦元年四月四日。義経去夜進飛脚申云。去三月四日午刻。

於長門國團浦合戦於海上自午正至晡時云。伐取之者云。生取之輩不知

其數。此中前内大臣。右衛門督清宗内府子也平大納言時忠。全真僧都等為

生虜。云々又寶物等御座之由。同所申上也。但舊王御夏不分明云々

醍醐寺雜記去三月廿四日於長門國平家与源氏合戦平家被討畢源氏

大將九郎判官義経。生取内大臣宗盛。右衛門督清宗。野降人源大夫判官

季定。授津盛澄。自害中納言教盛。中納言知盛。能登守教経。殺人左馬頭行盛

小松少將有盛中刎首者八百五十人不知行方人 先帝。八條院。修理大夫

経盛云此而書は安徳天皇の落させ

又諸書又載るところの 先帝の御旧跡とるる処左に記と

○阿波 祖谷の奥木屋平劍權現 安徳帝御出家と此処ましましとる。故後、御髪と神儀と祭るといふ

○豊前 くれ簗れ里安徳庵 此処を御落飾ありと云。四十余カマをばませと云

○肥後 神壘寺 地名、開山神壘和尚、安徳帝ありと云

○全 五箇山 此地の氏神ハ安徳帝ありて神体ハ宝剣ありと云。右一村皆平家の落人の末葉ありと云

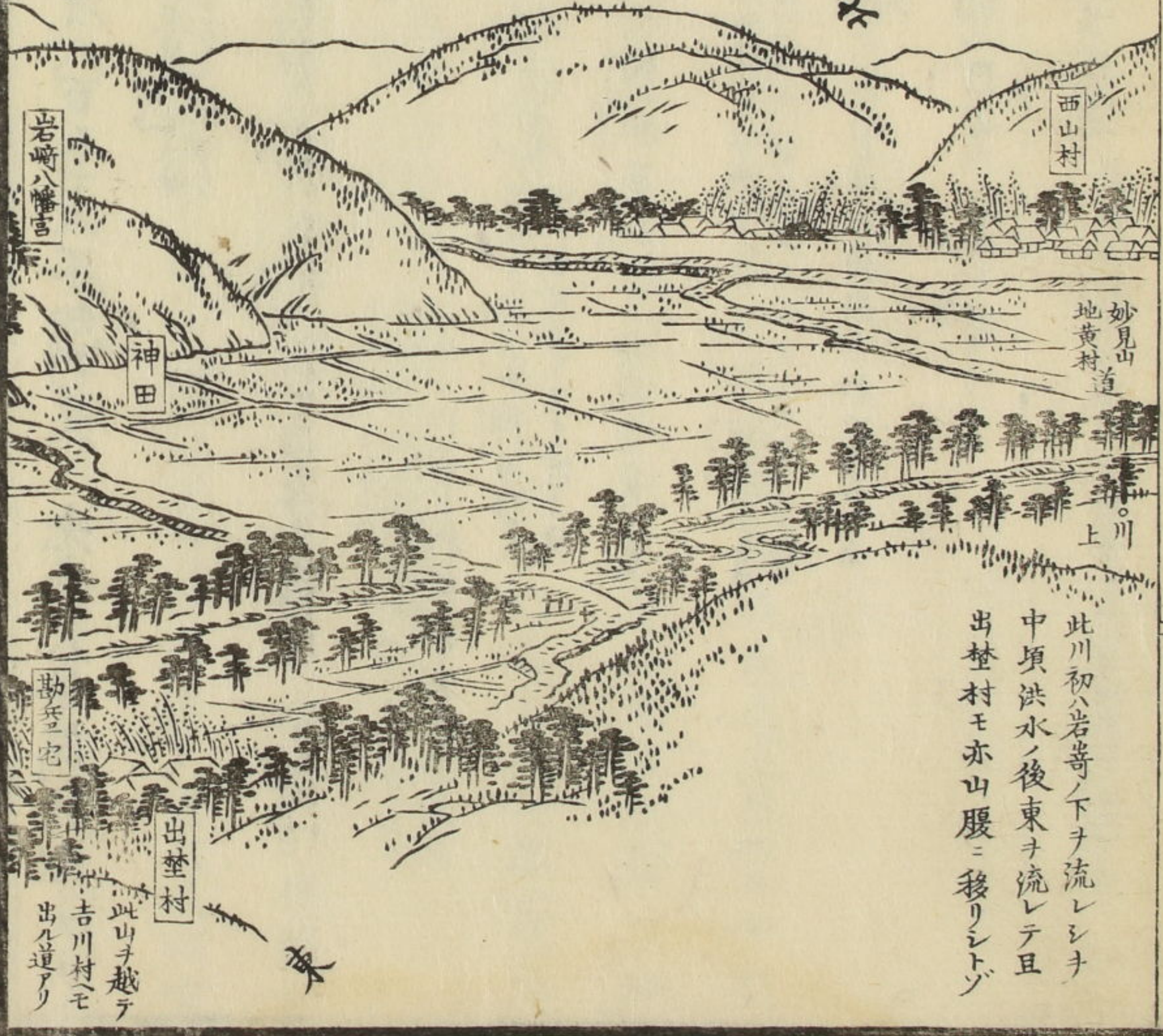
○日向 院社 院塚 安徳帝の御廟并御陵ありと云

○因幡 安徳寺 地名、一門皆ありと世を終りしと云

○對馬 世小普く言傳ふる処之界 右六国皆つとも 安徳帝のあのみせ給ひし旧蹟ト云

攝州能勢郡出塾村
岩寄八幡宮

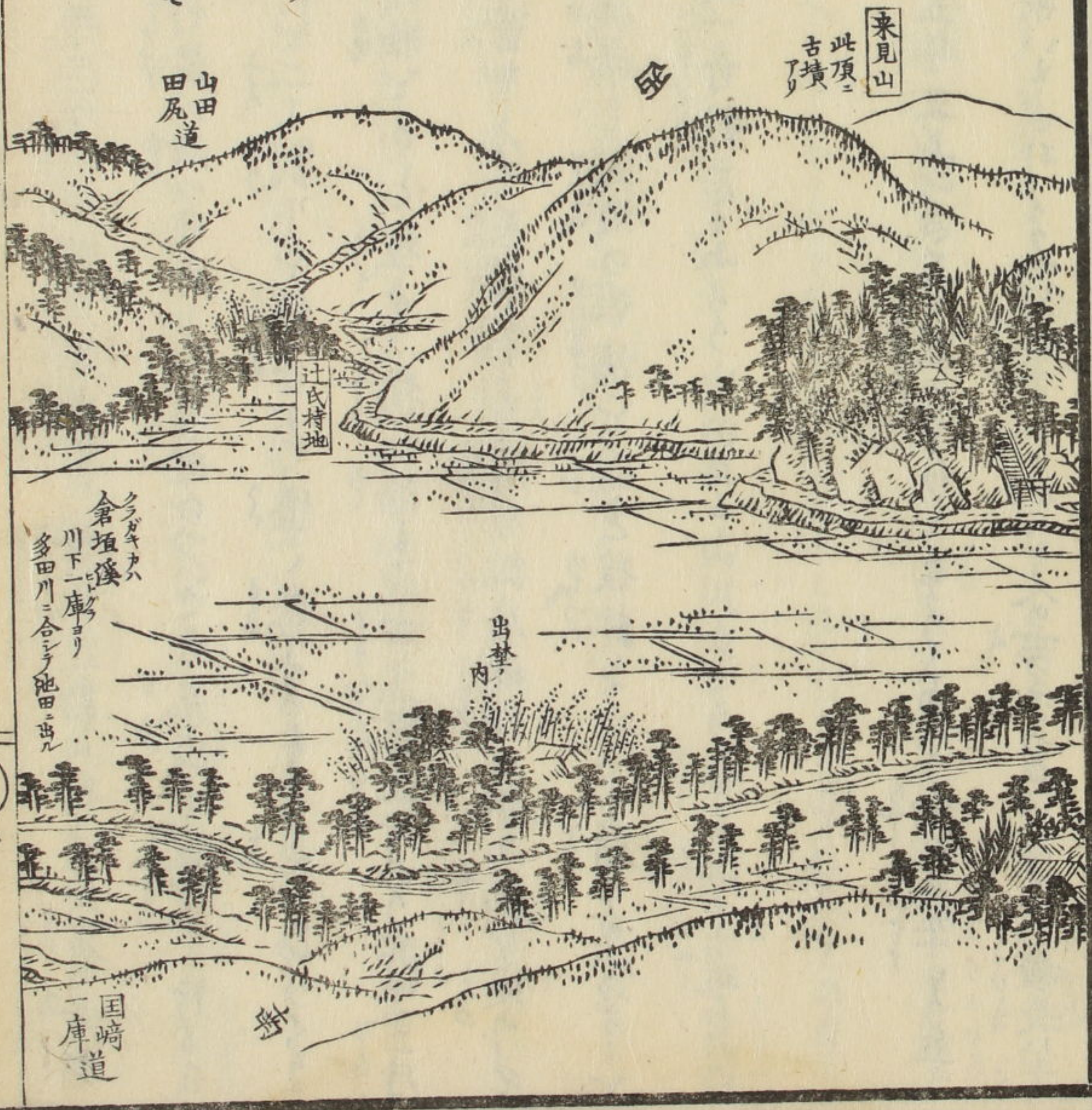
八幡宮ハ勘兵衛の家より
三丁より西より方境りてより
本文ノ符合なり神殿の中に
ハ小社有のこめて昔より其
中とひききり者近近年本
社再建の時地形も平均せし
とる小土中一面大石覆ひ
有しゆ人驚き恐して其すふ
御本社とたておれと多神社
とて岩山よりと川岸よりと見ゆ



此川初ハ岩寄ノ下ヲ流レシテ
中頃洪水ノ後東ヲ流レテ且
出塾村モ亦山腹ニ移リシトゾ

出野村より岩寄へ九丁
同村より未見山経房の
基へ九五丁
同村より大原村
未見権現へ九十五丁
同村より地黄村
機姫宮へ九丁余

○辻氏持地
遺書ニ大岩山ノ
半四分レテ云ハ此
所ナルベシ辻ノ宮モ
此所ナルベシ



上野段堂新録卷之四

然る又文化十四年三月摂州能勢郡出笠村農民辻勘兵衛と云ふ者の居室
 の棟木は一箇の竹筒の結つけ有しを修理のついで見出し取下一片は
 長さ三尺余の竹と二割しを針金にて堅く巻くは是れ是れ
 中ハ石灰のどろれ物なり埋り拂ひ除き古文書五行あり其中二行
 ハ和歌四行ハ遺書を記し系圖ハ藤原経房建保五年小認むる処あり
 則 安徳天皇と供奉し西海の戦場を遁き後終は山崩下りゆす
 詳に記せり是又一奇談あるふより池田の山川氏より委く写し送られぬ
 古文書と曰

こやう一建保五年丑ふぶき五日源のどけくまうり御年の五十より五と
 せふ南のりり糸いもあひゆる人ハ齡よことをおよそ人の世のまぢあをばはる種長ハ十

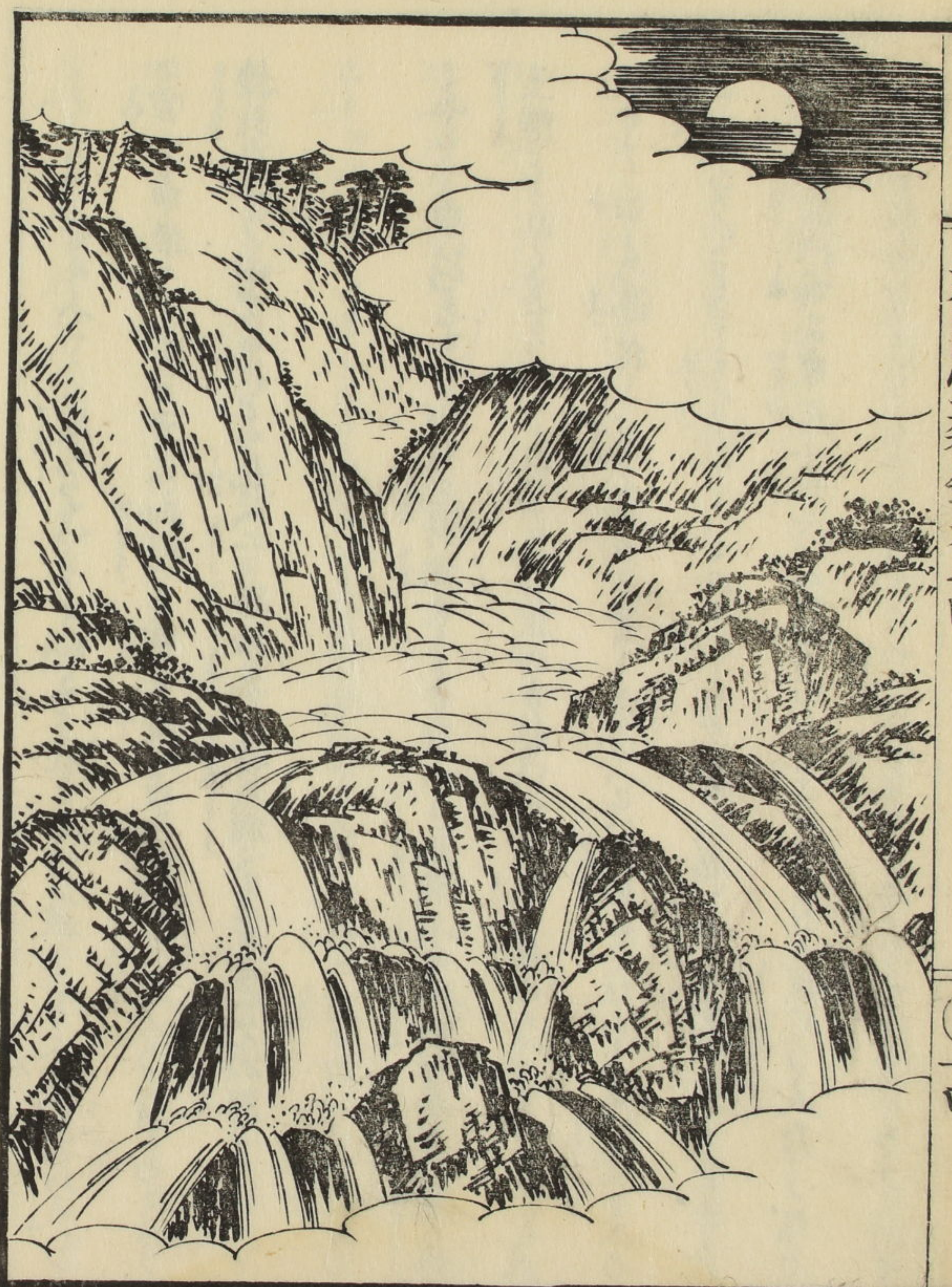
とせあゆり九とせまへ身まうり景家の十とせまうり二とせまへぬ種長の
 子れとて又刑部太郎光景家の子小次郎平三皆とらふあまれり我子左古磨
 光景あるがよく田ぐ一畑ちりてとあまへ世とていささかぬれりとのりし
 さだらもまへびとれも今もいそぢりぬらぬらあも身まうり世の世の子孫
 あもるものたへちうんは是までハ口づつもうりいさかぬれりよぬれり
 とて首じり入程よあらんともまへぬ鳩くへささへひり檀の浦よちり
 名よりうね名を後のよふともまへぬあまをそありひりぬぬささへ昔のあひ
 出るさへなまへりもささちり落くいささありひりぬぬあまをささへり
 ちりりり壽永四年乙巳三月廿四日の日二位どのひりり典侍大納言局□句當
 内侍河波内侍右將基道とれ経房太輔判官種長郡司景家とめられ我家

御さへ申さるる御りし御上り御泪をこれにせ給ひて二月廿八日景家の
 身とわたり一門の御りし御上り御泪をこれにせ給ひて二月廿八日景家の
 石見の國とて菅家の公達筑紫の國とてせ給ひて二月廿八日景家の
 八人目つとて山より山里を經る所々つとてせ給ひて二月廿八日景家の
 が一天の君とて天照とて神の御とてせ給ひて二月廿八日景家の
 もさびた奉り御幸とてせ給ひて二月廿八日景家の
 一日の日伯耆の國とて山里とてせ給ひて二月廿八日景家の
 ひとひとつとて山より山里を經る所々つとてせ給ひて二月廿八日景家の
 まの國府とて都も近づくとも門院の御夏とてせ給ひて二月廿八日景家の
 三月廿八日の國天王とて山里とてせ給ひて二月廿八日景家の

つと所より此のま乃郷へとてせ給ひて二月廿八日景家の
 此よりよりこの朝より夕露と御衣もとほりつとてせ給ひて二月廿八日景家の
 さん心もさつき折られぬとて御りし御上り御泪をこれにせ給ひて二月廿八日景家の
 むかよとて道とて御りし御上り御泪をこれにせ給ひて二月廿八日景家の
 まる御葉と上るよ二位殿の御りし御上り御泪をこれにせ給ひて二月廿八日景家の
 絶々たれどと種長景家とたがひよ左右とて御りし御上り御泪をこれにせ給ひて二月廿八日景家の
 のひよりとて例のどく奉るふ黍とて御りし御上り御泪をこれにせ給ひて二月廿八日景家の
 は種長とてふりて行つ里とたれどとて御りし御上り御泪をこれにせ給ひて二月廿八日景家の
 りわけせとて雨皮とて取出假の四阿とて御りし御上り御泪をこれにせ給ひて二月廿八日景家の
 涙のあきへぬとて景家の御りし御上り御泪をこれにせ給ひて二月廿八日景家の

大岩山おほいわきへ入中いりちゆうども四川よしかがはまはれ行く人いめと心のやど申まをすをねぞかふたふ日ひで
 重おもねく御腦ごのうをくわうよまあせの御氣ごんけもきもれくうまもぬぞカ世かよとのぼし木の
 やらどのことあんどひ出いで埴生はむいの庵いほとしてあまことばは奉りふびく二日ふたひあや
 日ひころこの御心ごこころも人もくわうよいさぬしう思召おもひまりくと朝餉あさぐいもあうくめさせ
 どと般はんくうれもんどりどろはこの山やまがどののりとしていふ三丁さんちやう太たとて家いへふ
 とのありこのふりりまあくくつうまらまこのゆづ月つきのやのふさう出い
 ければあうくわがくわくく小峯こさみは御幸ごゆきも奉り山の尾おしはひ又また行つい
 川の原のらへ下りぬ此辺このへはさう出いる大おほきいも不有ふありそのやうい水みづたへ青あおくち
 たういといもさうくわきさく人ひとをと岩いされとわい入い此辺このへはさうあかりろくく
 めぞさせ給たまひ志こころをくくもささせめ入い王上おうじやう故院こゐんは似にさせ給たまひく御心ごこころをく

くつうせりふより里さと入いらむ心こころもうれしく奉りて人の辻つちの宮みやはらつ
 の宮みやも申奉まをたる主上ぬしじやう日ひふと御腦ごのうも常とこは復かへりぬれが皆人みなひとよろこびあまれり
 種長たねなが申まをす山やまさうれども都みやこへ二日ふたひ路ぢ神かみ寄よ太物たぶつの浦うらも二日ふたひよさぬ路ぢの何所なんどころと
 して御幸ごゆきもさうくわく人ひとらもあひ出いで此山里このやまさとは志こころを世よの有ありぬも御覽ごらんせ
 らるちを申しさきもさうくの羈旅きりよもさうと申まをす此黒木このくろぎの御所ごしょを其その比ひの金かね樓ろう
 玉階たまかたとこれらさうくありひらるる里さとのめれいふ来る年くるとしのりあけせさうも
 此このさう甲かしり尋たづねく定よる南みなみもさう人のいさ川原かわらのそひろらよ田畑いりはさの
 山根やまねもあつてさうくわくわくつくれる外ほかのわが川原かわらと田代いりしろはせん今いまのさうか
 ひんぐの中なかは鳩とびは家いへ居い十畑じゆつ二ふたつこのかさうくさう原はらのり人ひとたう縁ゆかりを
 うんどれよさうくさうくのさうくも有ありさうくさうくさうくは行い



こと人又ききひさやうなる庵つらとてふとてさうらうたるげうも二位殿の御ふとぐら
 種長景家あうらぬ殿うまのこまのてまめやうと目まきまかりのぐ丹まの秋草を
 のりまぐ奉れる心ば今もさるる感涙せられ長月廿日あり水々の紅葉御
 覧せりと河合御幸船奉るまづ此地のひくけうなる横さぬたてまみ
 水東より西へ流れま北より南へ落合ぬ廻りの山々外山の梢茂らうち川原を
 廣くうらひけ河合いとわささる沢うらて水よあり沢の中嶋と市目が笠てふのめ
 似うらうらうらき木のりませし有西の山はこま家うらうら見てう川原と
 北へのありて東の山ごま家十むりうらて色こま木々も見うらうら置
 川原とさうらぬ水もゆるねやをけくゆるま至る杜ありうらとあけのうら垣
 神びうら丁太いとて姫の宮となんあがめまのうらまうらあうら御うらとて

冬述しものこはともむよれ又恋しき君のつゆは味まさぬ

煙房をまてふせぬあへど

うらうらとてひるむふのまうふもてまのうらぬのうらひまうらうら

典侍々々のおのちうら

うら姫の移れけりまてわうあやさるるまてとてお勢なるぬる

こまのわうきま君のうらまてせうあまのうの山はまは家あり丁太い僧ひくま

おれりといもむまがけは還幸はまてまのらんとりこの道まうらひびり又夕雲のまて

間又家いつひのまあもあれはうらまてつへ例の丁太さぬの里とこま目いせうのまて

還幸のり今日の日もうらうらとて主上とてうらまてなれがうれくもまうらぬ十月廿四日

うら雪うらて常みゆなれ山々のいもむらうらうらうらうらもの峯は御幸のり

此の御紀に人未見やまあらんるるが峯ともいふ霜うつ月より山々の雪つりり

心のわもつけいふうと種長景家らりの□くは都大物へ主上の供御の料御

調度あどしうきくく飯るさぬいさき都又君と安徳天皇とまじたきみりぬ

女院へ北山大原へ入御あつり景家久りく申□上の中く又志せのり君の御心

あびやうあつりこれ心よぬ此くもされく壽永五年都へ文治三年とあれり

春はとよまええく朝あく水さわりて川の隴つせもつてわくうははく玉の枝又玉の

花をめぐりませゆひ日とよ岩崎又御幸あつて御らん有弥生の中過るよりあ

梢とも見へざり山櫻と山とものごとく春のさらうりる卯月をあつり

ふく御腦さうちれがらうりあゆまふくわくわくは御薬調進□

□□上まの五日うりてちあつりまをせひいれども色もくつ冬のももあつり

らせ終りていふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

うりて日ゆいたのいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

奉るあつて同いふ十七日朝玉とけ香りて登霞くあつり海の中も山も

ふり奉る君よあつれ奉り手よいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

うへ都の大原よすわん口よわあへど種長景家しあてふさぬうを後せん
典侍よめらるる遠ぶがふつ久祭るを臣る誠るれといひらびらぞ御社よまれん
心うく里のりのらうく小家しつひ田ぐくのささきとて田らとひらき未のこ
御國忌もとたんと典侍よめらるる御社よつ久奉る種長の君の未見の御つら
哥と原よと未見権現とらめ奉れりあまうと此ゆも人よ見とるこらるれ

建保第五五年九月二日 從四位上侍從行左少辨藤原經房

元仁元年壬申八月七日遊 行年五十八
藝未見山辺 辻社社 此二行八後人の筆之

左古磨

經實 左述 行年六十三
文永八年未三月二日

經久 勤解由 行年七十
延慶元年申十月十八日

經冬 勤太 五十七
延慶三酉年十月十日

恆助 中六 九十二
永和四年

助實 介口 行年七十二
應永六年巳卯八月十日

經成 常七 三月九日
永享九巳

成實 右衛門 四十四
長祿二年 寅五月

經吉 吉右衛門 六十九
永正十五寅五月

經稱 孫左衛門 七十四
永祿五戌三月

經春 勤兵衛 三十三
文祿二亥 四月十五日

經一 市良兵衛

經忠 正忠左衛門 孫左門弟
永祿元年午十月三日

經久 久右衛門 五十二
天正十五亥 四月十八日

孫一

○此間料仗切上りの文と失れ

うへまのり

左少辨藤原經房

かきつりのきりの空と吹へく月よちう格とまのちのちのち

此書數百年と經るが蠹損磨滅ホのふりよみ得るは知々す可く然るを
しめてよまば唯りのまよふ人又假名づひのまよふてよをはの調らざるをも
聊つて心ど加へむるの基道と基通とも書晦日といふまじりてあせる類いも形本
書のまよ記と後考の一助と備ふ見人疑ふまぢあられ

勳兵衛の家族世々別々御社と奉仕と尊敬と日々あつるは然れども
故とも今まごの知らば又勳兵衛の家世本文系圖より以未今に至るまでの續家譜
又詳あり叔この外勳兵衛の家又持つてく物ハ小長刀一振りるを其
何の傳説もなき一安徳帝行宮の跡あつては經房朝臣の基地末見權現の社
皆本文ふ言々今又旧跡ありて土地のありさぬ旧地と今と聊もかた
の瀨川にあり今東山の本と水添る景家種長ホの末葉も近邑大原村より是等
あり此川國等と經く一庫の跡も落る

平家の餘類とむり言傳へれど原来家又持つてく物もなれ其謂ハ今迄
ハ知らば一とや按ぶるは經房朝臣の傳所見たり然るは吉田大納言の祖なりと
同時同名なるをてて混乱の説せよ多しされど此地と終られしと明白なれば別人
あると疑ふべし又曲亭子の玄同方言は此事を挙る好事の者の所爲るうと
いふとも強ふ介つべし非ど其旧跡土地の形勢本文より符合せり

○ 摂州嶋下郡粟生福井の兩村は作る所の米ハ無雙上品なりて伊丹池田の酒を
醸する本米といふ俗ハ粟生米と稱ぶ此等の故ハ摂陽群談名物土産の中に
福井酒と有又此福井村は於て酒造とあり當村ハ福井重治郎といへる農
家代々村長のあり其先祖宗賢これと始むといふ抑此宗賢の遠祖ハ人王五十九代
宇多天皇の皇子敦實親王九代近江源氏佐々木源三秀義の三男佐三郎盛綱

後胤^{こういん}ちの宗賢^{そうけん}幼稚^{ようぢ}の頃より出家^{しゅつが}先祖^{せんぞ}親族^{しんぞく}戦死^{せんじ}の菩提^{ぼだい}とてしるふ中年^{ちゅうねん}ふして
 同村^{どうむら}麒麟^{きりん}山真龍^{さんしんりゅう}寺^{てら}小登^{せうと}りて真乘^{しんじやう}坊^{ぼく}の主^{ぬし}とる然^{しか}るふ元龜^{げんき}の頃^{ころ}織田^{おだ}信長^{のぶなが}の爲^{ため}ふ
 亡^{なげ}され伽藍^{がらん}とてぐく廢^ふまるふより扱^{あつか}ち還俗^{げんぞく}して農夫^{のうふ}とあり活業^{くわくごう}の術^{じゆつ}とて竭^{きやく}
 志^しむく神佛^{しんぶつ}と祈^{いの}りてふ一夜^{いつや}の夢^{ゆめ}ふ神童^{しんどう}来^きつて竹^{たけ}の切^きるを授^{まか}けていりて是^{これ}孤^こ
 以^もて業^{ごう}とたしと忽^{たちまち}夢^{ゆめ}さめて枕^{まくら}辺^へと見^みふ右^{みぎ}の竹^{たけ}わり手^てふとりてよく見^みふ竹^{たけ}
 の槩^がちり是^{こゝ}ふよの^ま料^{りょう}を用^{もち}ゆる活業^{くわくごう}と爲^なんと心^{こゝろ}づれ終^はる酒造^{しゆぞう}と始^はめりる時^{とき}ふ
 其^{その}酒類^{しゆるい}ちた上^{じやう}品^{ひん}ありて普^ふく世^よふりてとやせ故^{ゆゑ}益家^{えきか}繁昌^{はんじやう}福井^{ふくい}酒^{しゆ}の名^な
 世^よも高^{たか}くありしとぞ代^よ々^よ此^{こゝ}料^{りょう}搯^あと秘藏^{ひざう}して天授^{てんとく}の槩^がと稱^{なづ}べ

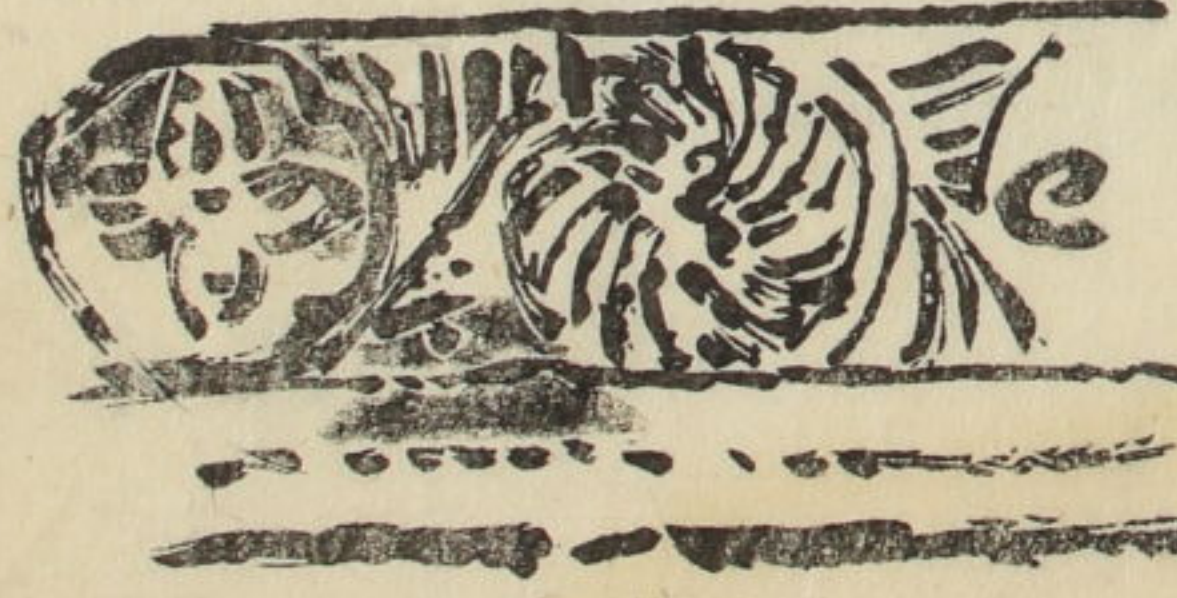
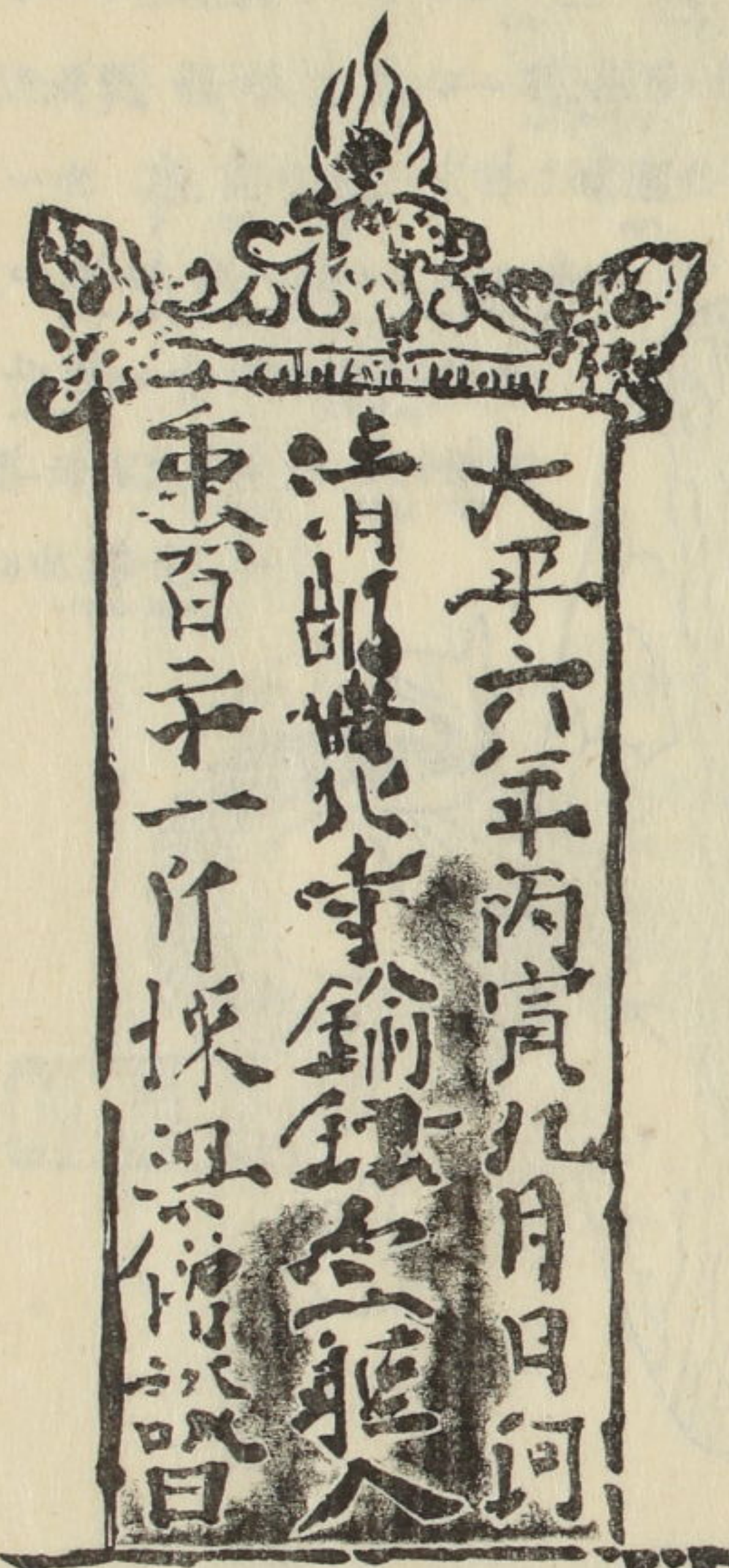
槩之圖

姓六半

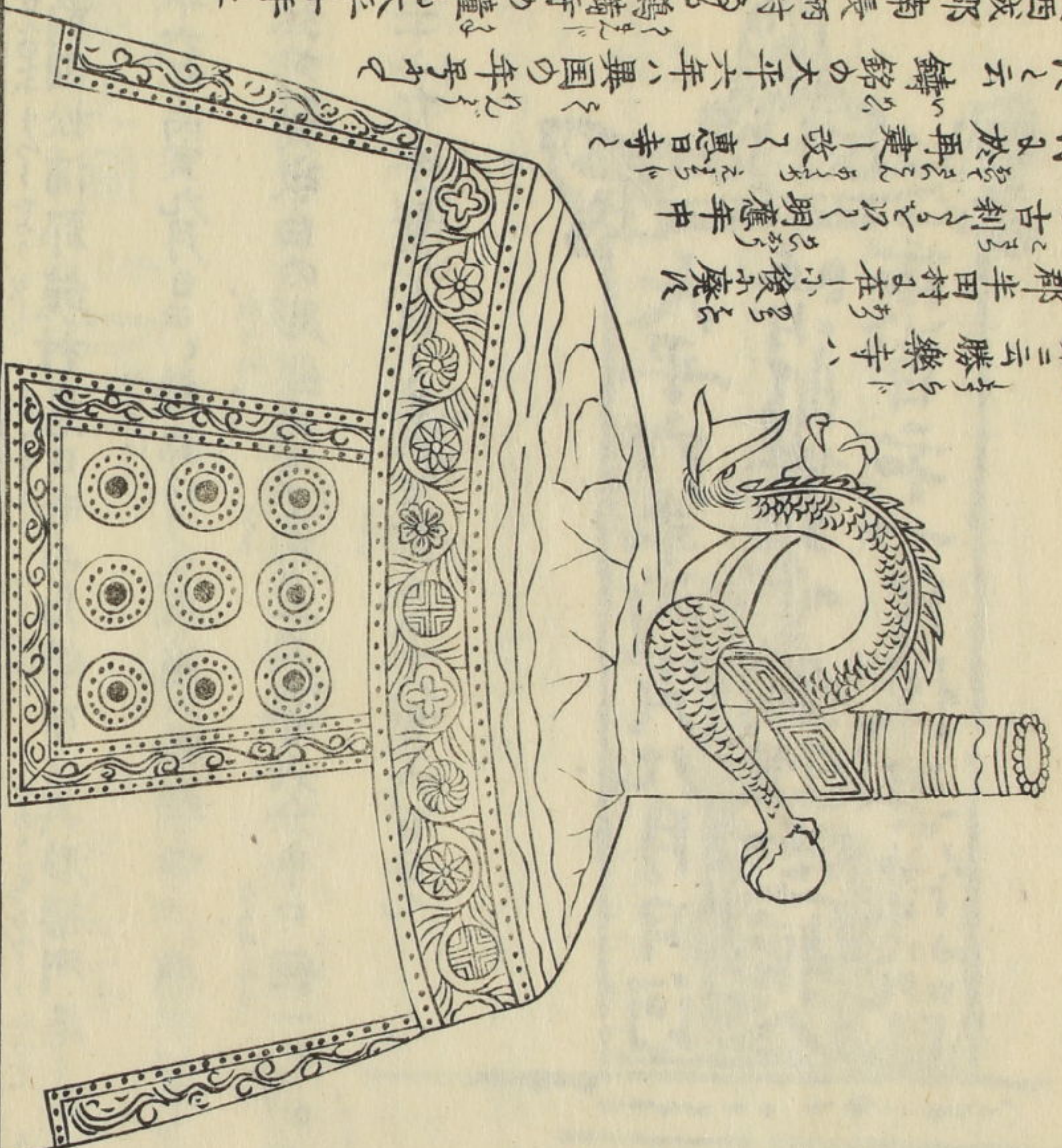


長六寸一歩

○肥前^{いぜん}國^{のくに}松浦^{まつら}郡^{のぐん}鏡村^{かがみ}惠日^{えにち}寺^{のてら}小鳥^{こどり}鐘^{かね}わり其^{その}形^{かたち}播州^{はくしゅう}尾上^{おののへ}の鐘^{かね}ふ彷彿^{ふたふた}とあり
 大平^{おほひら}六年^{のとし}丙寅^{のえとら}九月^{のつき}日^{のひ}云^い鑄^い銘^{めい}わり又^{また}奉^{ほう}施^し入^{にゅう}勝樂^{しやうらく}寺^{のてら}云^い應安^{おうえん}七年^{のとし}甲寅^{のえとら}十月^{のつき}日^{のひ}願^{ねん}二王^{にわう}
 沙弥^{さみ}妙賢^{めうけん}敬白^{けいぱく}の彫^{てう}銘^{めい}わり高^{たか}サ二尺^{にせき}六寸^{ろくすん}六分^{ろくぶん}半^{はん}口^{くち}徑^{けい}一尺^{いつせき}四寸^{しすん}七分^{しちぶん}律^{りつ}中^{ちゆう}平^{へい}声^{せう}
 百^{ひやく}二十^{にじゅう}一^{いつ}竹^{たけ}今^{いま}量^{りやう}とて以^もてこれ^{これ}と計^{はか}るふ十八^{じゅうはち}貫^{くわん}六百^{ろくひやく}目^め也^{なり}



古鐘之圖



彫銘三勝樂寺ハ

旧同郡半田村ハ在ル後ハ廢ル

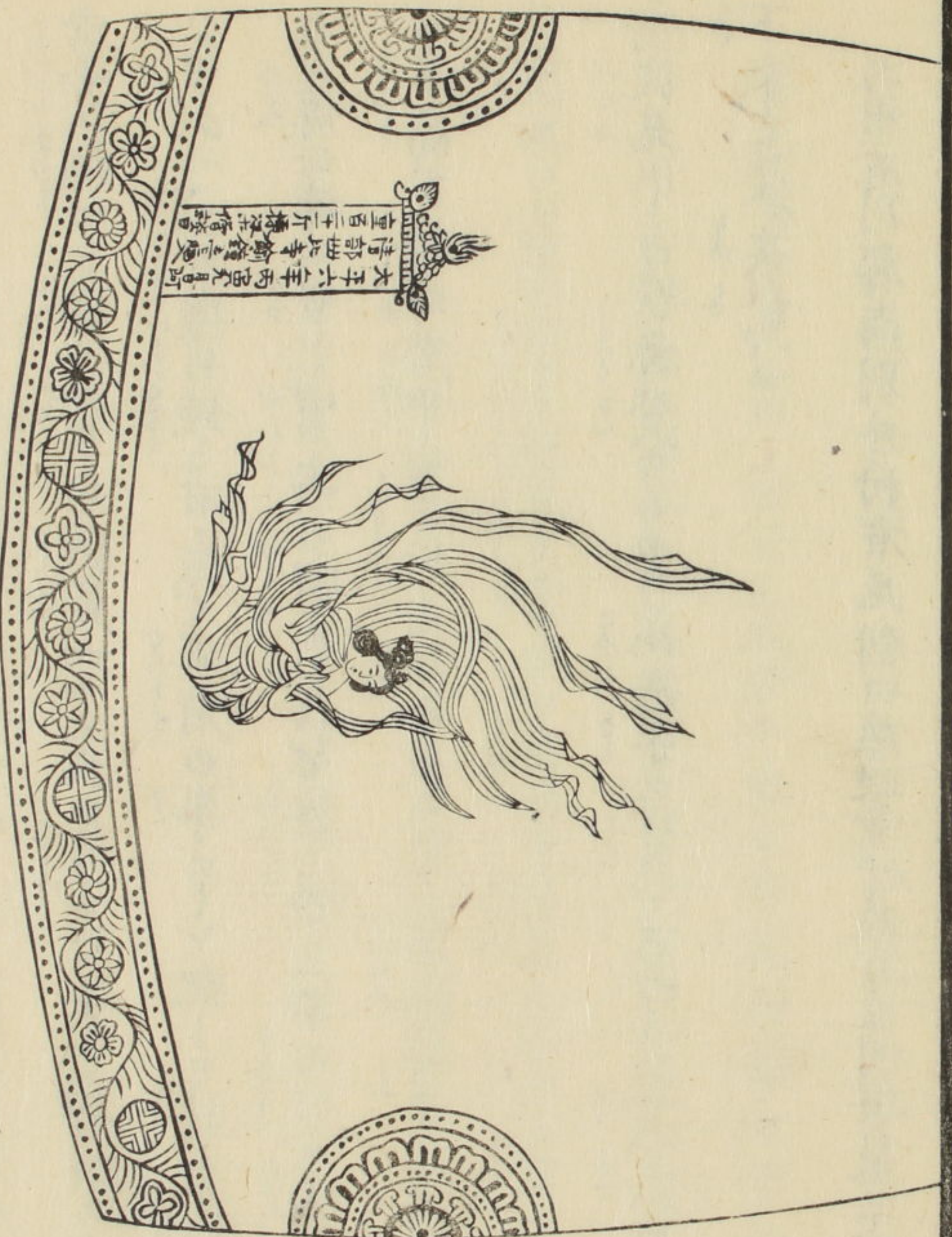
然レ古刹ト以テ次ニ明應年中

鏡村ニ於テ再建シ改メ惠日寺ト

号シ云鑄銘の大平六年ハ異國の年号ト也

扱及西成郡南長柄村ニ在ル鶴滿寺の鐘ハ大平十年ト

号シ云ハ異國の号ト且同ク項ニ鑄ル之ル也ト寛田



大平六年西成郡南長柄村
在ル鶴滿寺の鐘
號シ云鑄銘
鑄銘三勝樂寺

○河内國石川郡南別井村ニ慈眼寺と云々（トシヤクニシテ）黃檗派禪宗の尼僧寺なり本尊ハ
 聖觀音なり聖德太子梅の木ニ以テ作リ（トシヤクニシテ）又自然石の弥勒佛別井の古跡亦有
 當寺小楠公自筆の書と紙員六十三枚の冊子なり大さ六寸許の小本なり書名
 ありて跋又軍檀目鏡と有とて軍用の事と記と終又建武二年八月日と
 あり傳云楠公曾と軍事の暇とこれと筆記一子正行と云のひと云ん彼世
 又名高き櫻井の宿と正行又附と云のひ一軍法の書といへる是と云ん
 又左もりん平近末諸侯方當寺と訪ひと披見一々と數あり就中小田原
 侯披見一々ひ稱賛のあり此冊子の宮と云つひ其蓋の裏又自筆と
 下一々の其記と云

河州石川郡南別井村有尼刹曰慈眼寺什器有故河楳泉三州守贈正三

位近衛中將楠公筆録真蹟一冊裝釘爲小葉子無外簽又無書名跋有軍
 檀目鏡云々建武二年八月日正成若干字又有花押筆力道絶爽々有神
 公之用兵雖不可端倪公之威武可以相見焉嗚乎距今四百八十年其人
 則無其書則完好無恙尤可喜矣余時既爲大坂處守村即今隸於小田原
 以故得親寓觀細讀焉此冊子原藏以子匣而緘滕之不損何以爲守備迺
 另造套函固扁鑄而歸之曰可以善藏之不欲公諸非其人矣蓋公之志也

文化十二年歲次甲戌夏五月

小田原城主從四位下大久保加賀守藤原忠真 花押 識

○同郡大箇塚の東又梅川と云る流れりり水源竹谷より出り河内村と過加納小

至り白木溪と合流して終は石川入此水辺は夏月螢多く生ほ長大りて通例
の螢子倍せり名又高と宇治石山もあさく、劣らば頗る喜觀せり

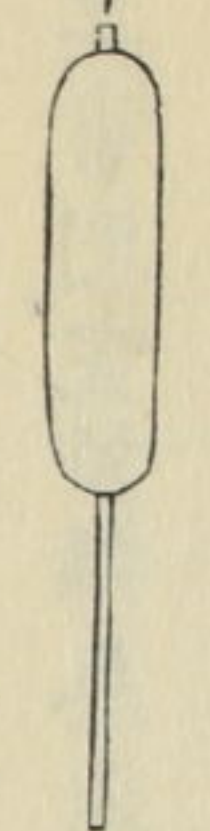
又大箇塚村より七町許東の山分は金蓮山大寶寺といふ佛刹は本尊阿彌陀佛

の座像長九一丈許後光は數多菩薩と彫刺を總長壹丈七尺許國中の大佛といふ

○肥前國天草とて製する魚饅の形長さ五寸余徑七八分許細篠竹につけて所謂

蒲の穂の鉾のぞう是こと其始蒲の鉾に似たりといふと蒲鉾と号し古風

ありて一圖のこゝ幾内といふ其名のこゝ形と異なり



就中竹輪といふもの其形長大なりといふとも大同小異なり大蒲鉾とも言へる

ものなり是は切らるる処竹の輪切に似たりといふと以て竹輪といふをさるるを又

此太さ竹のぞれを二又割て半分と板につけたりと半片といひたり然る

後又尚蒲鉾と言ふはせし京師といふ其名のこゝ半平といふものなり

浪花とて摺られとも真の半片は蒲鉾と言ふは其切らるる形も表し

蒲鉾行燈蒲鉾窓をといふといふをり其上京師とて半片と号するもの

又浪花とて葛籠といふは販ぐ又安平と号せり是半片又籠をかるはほての

名をり然れども是と高者も求め食するものも知る過行りのあり



